特集

能楽師シテ方観世流 大槻裕一さんの挑戦と愉悦

憧れを原動力に―

昨年度、「咲くやこの花賞」「大阪文化祭奨励賞」を受賞し、能楽界の若手ホープとして期待される大槻裕一さん。古典はもとより、一昨年から取り組む「能狂言『鬼滅の刃』」も好評で、異分野との共演や独自の能楽講座を企画するなど、新たなファンの獲得に余念がない。そうした挑戦的な活動や能役者としての思いを伺った。

大槻裕一（おおつきゆういち）さんプロフィール

能楽師シテ方観世流。1997年大阪市出身。2000年『老松』で初舞台、2005年『俊成忠度（しゅんぜいただのり）』にて初シテ。2010年まで数多くの曲で子方（こかた）を勤め、2013年に観世流シテ方の人間国宝・大槻文藏の芸養子となり、大槻裕一を襲名する。2015年に自主企画公演「大槻文藏裕一の会」を主催。七月大歌舞伎『源氏物語』、狂言風オペラ『フィガロの結婚』、大阪クラシックなど、他ジャンルとの共演やテレビ、ラジオにも多数出演。2023年度「咲くやこの花賞」「大阪文化祭奨励賞」受賞。公益財団法人大槻能楽堂 常務理事。

『鬼滅の刃』ファンと能楽堂

近ごろ、能楽堂で一風変わったエピソードがあった。昨年と一昨年、人気漫画『鬼滅の刃』を原作とする能舞台が上演され、登場人物のコスプレ姿で能楽堂にやってくる人がいたのだ。題して「能狂言『鬼滅の刃』」。獰悪な鬼に家族を皆殺しにされた炭売りの少年が、唯一生き残ったものの鬼と化した妹を人間に戻すため、兄妹で鬼を討つべく苦難の旅に出る物語で、大槻裕一さんが主人公（シテ）の竈門炭治郎と妹・禰豆子を、観世流シテ方の人間国宝・大槻文藏さんが仇敵の鬼・累役を勤めた。

裕一さんは、普段から映画や演劇を観ていて、〝能でやったら面白そう〟と思うことが多い。そうしたチャレンジ精神で、これまで歌舞伎やオペラなどにも数々出演し、ジャンルの違いにこだわりはない。『鬼滅の刃』もその一つで、能役者である自分の性分だと笑う。

「登場する鬼たちはもともと普通の人間で、鬼に襲われて無理矢理鬼にさせられた、いわば弱者です。能にも、子どもを失った母親や、夫に捨てられた妻など、弱者を主人公にした狂女物と呼ばれるジャンルがあります。『鬼滅の刃』は、そうした能の世界観に通じています。思い立ったのはコロナ禍の前で、すぐに文藏先生や野村萬斎さん（能楽狂言方和泉流）に相談し、コロナ禍明けに実現しました」

©吾峠呼世晴／集英社 ©吾峠呼世晴／集英社・OFFICE OHTSUKI
撮影：瀬野匡史（工房円）
「能狂言『鬼滅の刃』」で竈門炭治郎を演じる大槻裕一さん

©吾峠呼世晴／集英社 ©吾峠呼世晴／集英社・OFFICE OHTSUKI
撮影：瀬野匡史（工房円）
「能狂言『鬼滅の刃』」で禰豆子を演じる大槻裕一さん
（能では、人間ではない存在や特定の役を演じる際に面をつける）

演出は野村萬斎さんで、自身も鬼役など数役で出演。東京、大阪、京都、福岡、名古屋、横浜での公演は大盛況となった。

能の魅力を伝える

コスプレ姿でつめかけた『鬼滅の刃』ファンたちは、能楽堂の雰囲気や伝統と格式に則った謡や囃子に圧倒されたのか、その静寂と神秘的なようすに引きこまれた。それこそが裕一さんの狙いだった。

「能狂言をあまりご存知ない方に合わせて表現を現代風に変えてしまうと、わざわざ能楽堂で見る緊張感が失われます。いつもどおりに上演し、能狂言の伝統的な雰囲気を味わっていただきたいと思いました」

初心者の方には、700年の歴史と伝統を感じてもらうため、あくまで〝本物〟に触れてもらうことを重視した。一方、見巧者には『鬼滅の刃』がどう演じられるのか、新鮮な気持ちでお楽しみいただきたかったという。その狙い通り、来場者アンケートではどちらのファンからも「また観たい」という声が大多数を占めた。

この公演の成功で、裕一さんは令和５年度咲くやこの花賞（大阪市）を受賞した。今年８月には、期待に応えてSkyシアターMBS（大阪市北区）で再演。「能を観たことのない若い人たちに能の魅力をアピールした」との贈呈理由のとおり、裕一さんは、今回の再演につながったことで能・狂言の新たなファン層の獲得に手応えを感じた。

二人の父

裕一さんは、シテ方観世流 赤松禎友さんの長男で今年27歳。２歳８か月で初舞台を踏み、幼稚園から小学生時代にかけて三島元太郎さん（金春流太鼓方の人間国宝）や藤田六郎兵衛さん（藤田流笛方十一世宗家：2018年没）らに囃子の指導を受けた。平日は学校から帰ると大槻能楽堂で稽古をつけてもらい、土日に出演。東京や福岡の舞台に出るのも日常だった。

「赤松の父は能への思いがとても熱い人ですが、私に対する稽古は厳しくなく、叱られた記憶もありません。私は、舞台での歩き方や立ち方などの基本をみっちり指導してもらいました」

それでも将来は能楽師になることを求められたり、稽古を強制されたりしたことはなかったが、「能のお稽古ばかりしていたので、結果としてハマっていった」という。遊びといえば、画用紙で作った面と手ぬぐいを縫い合わせて作ってもらった装束を着て、祖母が観客の〝能ごっこ〟。ゲームやテレビアニメには関心がなく、学校で友だちがポケモンの話を始めると、すかさず姿を消していたと笑う。

転機は15歳のとき。裕一さんが大槻文藏さんの芸養子になったのである。芸養子とは、芸事の上で父子の関係になること。当初は〝大槻文藏の後継者〟と目される責任の重さが分からず「なんとかなるだろう」と構えていたが、その気持ちはすぐに吹き飛んだ。

鍛えられた精神力

「芸養子になって、文藏先生のツレ（相手役）を務めることが増えました。年齢の割に大役がつくのはありがたいのですが、まわりは人間国宝をはじめ重鎮の先生方ばかり。そうした方々の邪魔をしては絶対になりませんし、未熟な素振りすら見せてはいけません」

能は、歌舞伎や演劇と違って出演者と一緒に稽古をせず、普通は本番前のリハーサルもしない。裕一さんは、ぶっつけ本番で〝できて当たり前〟の世界で自分のレベルを上げるには、「先生方がやってきた以上の努力をするしかない」と心に決め、日々稽古に励んだ。また、シテは囃子方の演奏に合わせてセリフを謡で表現したり、動いたりするため、囃子や謡の先生に稽古をつけてもらうことも増えた。高校時代の裕一さんは、そこでの厳しい指導に心が折れそうになったこともあると打ち明ける。

「東京の亀井忠雄先生（能楽囃子葛野流大鼓方の人間国宝：2023年没）の謡の稽古では、一箇所でも間違えると最初からやり直し。30分ほどの演目を、朝10時から昼２時半まで、正座したままぶっ続けでやることもありました」

そうした厳しい稽古や重鎮たちとの共演を通して、精神力も鍛えられたという。芸養子になって11年目の2023年、能楽師にとって関門の曲といわれる『道成寺』を初演。その演技が高く評価され、令和５年度大阪文化祭奨励賞を受賞した。

「子どもの頃は〝あの衣装がカッコいい、あの楽器を弾いてみたい〟と憧れ、やがて〝あの演目をやりたい〟〝あの先生のように上手くなりたい〟と憧れる。そうした憧れを持ち続けることが大事だと思います」

『道成寺』も「能狂言『鬼滅の刃』」も、原点はそうした「憧れ」だった。

鑑賞者の裾野を広げる

能は、そのセリフや動きゆえに難解だといわれ、初心者にとっては近寄りがたい世界。そのため裕一さんは、演者が育つことと同じくらい、多くの人に能を楽しんでもらうことが大事だと考えている。大阪文化祭奨励賞の贈呈理由の一つにもなった普及活動『月イチ能楽講座』は、裕一さんが2022年に小鼓方の成田奏さん（令和４年度大阪文化祭奨励賞）と共に東京で始めたもの。能の作品や見所などについて、実演を交えて解説する月に一度の事前講座で、分かりやすい言葉で解説してもらえると好評だ。当初は数人の受講者だったが、今では数十人に増え、大阪や京都でも行っている。

今年６月、咲くやこの花賞と大阪文化祭奨励賞の受賞記念として開催された「大槻文藏裕一の会」（大槻能楽堂）で、裕一さんがシテを勤める『養老 水波之伝』を観た。裕一さんが「ロックだ」という通り、クライマックスの「神舞」のシーンでは、シテの山神と囃子方の凄まじい気迫とテンポの速さに圧倒された。「お客さま以上に能楽師が楽しんでいます」という裕一さん。大盛況の能楽堂は、次代の棟梁（一座を代表する役者）と、その指導にあたる大槻文藏さんはじめ重鎮たちへの期待の表れにほかならない。

（ライター 三上祥弘）

①『養老 水波之伝』で「神舞」を舞う山神（後シテ）の大槻裕一さん（2024年６月１日／大槻文藏裕一の会〈大槻能楽堂〉）②大盛況の大槻能楽堂 2024年６月１日「大槻文藏裕一の会」③『葵上』での六条御息所（ろくじょうみやすどころ）ノ生霊役（シテ）の大槻文藏さん（左）と照日ノ巫女（ツレ）の大槻裕一さん（右）（2024年６月１日／大槻文藏裕一の会〈大槻能楽堂〉）④『月イチ能楽講座』（東京）での大槻裕一さん（右）と成田奏さん（左）